

住井すゑとその文学の里(四十九)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

つくば市在住・中根房子さんの思い出の記―『時空を越えた慈愛のまなざしの住井先生』―

中根房子(平成22年1月7日記す)

正月三が日もつつがなく過ぎました。

今日7日は住井すゑ先生が生きていれば百八回目の誕生日にあたります。

明治35年(1902年)という遠い昔に生を受け、95歳と半年近くも生きられた先生は、もともと人間らしく人間を全うされたと思っています。

私は先生の信奉者の一人であることを何よりも誇りに思い続けて、今日に至っています。

さて、正月7日は「七草粥」の日です。毎年独り暮らしでも七草粥を楽しんでいます。先生に思いを馳せ、心で対話しながら伝統的な「粥」を自己流に食しながら先生の誕生日に先生からの慈愛のまなざしを脳裏に浮かべて楽しんでいるのです。

真つ赤な人參は太陽を、大根の葉っぱは緑豊かな大地を、真つ白な大根や米、餅を配して彩りも鮮やかな大自然に見立て、先生も一口いかがですかと語りかけては満足なのです。誰が考えたかバランスよく考案された粥の小宇宙を楽しんでいる自分の姿に童女のような先生の瞳が重なっ

て、不思議な世界を醸し出している余韻の中で私も微笑んで今日を過ごしているのです。

先生の存在を知ったのは私がまだ10代の昭和30年頃でした。

ふるさとの伊奈村(現つくばみらい市)は青年団運動の盛んな村でありました。3歳年上の私の姉を介して知った先生は実に新鮮強烈であったと記憶しています。

昭和も30年代の農村で女が多勢の前で自分の意思を主張し、意見を述べる。つまり、しゃべるなどと考えべしなかつた時代に先生は近隣の農村の若者たちの学習会に、講演に、成人式に「こあいさつ」の依頼を受けて引つ張りだこでした。モンペ姿で気取らないわかりやすい話し方で聴く者の心をグングンと引き付けられてやまなかつたのです。

先生は農村の女たちに、常に行動する勇氣を持てと発信され続けられました。日本農業新聞の『女の階段』の全国集会にも駆け付けては元氣付けられていました。

ある時は、茨城県の農家のペンを持つ女たちの『いばら』の集会の会場に先生宅をお借りしたり、現代農業の依頼での座談会も先生のお宅を会

場に拝借しました。

先生は常に弱い者の味方、権力のかさにする者を良しとせず、先生の根本には、人間が好きだったからこそ、「はたらく人が地球のあるじ」と色紙に書いてくださったのだと思います。

先生からの数々の伝言、色紙に託されたものなどを、私は書き写し、目に付くところに飾っては座右の銘にしました。

私は先生のお連れ合い、犬田卯先生の『村に闘ふ』やその他のものも拝読し、卯先生の世界観にも傾注していました。幼い頃から親しんだふるさとの卯先生の方言訛りがまるで子守唄のように心地よく心に響いて懐かしく思い出します。

私の母は牛久沼の沼べりの村、小さな集落の出身です。

物心つく頃から母の実家に連れられて行くのが私達姉弟の最大の楽しみでした。浮田と呼ばれる沼の田んぼや水路、田んぼの寄せに植えられている黄色に花咲くアヤメ。田植えや稲刈りも手伝いに行った娘時代を振り返ると懐かしいです。

私の父はすゑ先生よりも一歳年下、95歳に1カ月足らずの生涯でしたので、父母を通して先生ご夫妻の生きた時代を思いやることも出来ました。生身の人間として先生が少しずつ老いて行く様子もまた父母と重なって切なくなっていました。

卯先生の小説を通して父たちの青春時代がどうであったのかを知ることも出来、その時代背景の中で悶々

と悩み苦しみながら「改革の炎」を次代の人間の幸せの為に燃やし続けた卯先生の気概も理解できるようになりました。

卯先生は「日本農民文学会」初期の活動に関わられた方です。もう半世紀も以前のことではありますが、その情熱の燃えたぎる炎は現代のわたしたちに点火されたと思っています。その炎を次世代へバトンタッチしたく文字を刻もうと覚悟させていただいています。

：七草粥は野菜類の乏しくなる冬季の野山からようやく探し当てた野の幸。無病息災を祈った先人の叡智の結晶であります。

私も七草粥に感謝しながら命の限り、未来永劫に向かつて、時空を越えたすゑ先生の遺志を続く子らに伝達しようと心を新たにしたい一日でありました。



住井すゑ(写真右)と中根房子さん

―平成2年(1990年)12月住井宅書齋にて撮影―